

**双葉町復興町民委員会 高齢者等福祉部会
ワークショップ 第2回 報告書**

- 日時 平成27年9月3日(水) 13:00~16:00
- 場所 双葉町役場いわき事務所 2階大会議室
- 参加者 別紙座席表のとおり
- テーマ 「出し合った課題について、議論を深めるテーマを決め、課題や解決策を考える」

■第1回で整理した課題の絞り込み

参加者は、4分野20の課題の中から重要と思われる3つを選択し、評価点を各1点投票した。その評価点をもとに順位を付け、第1位が3課題、第4位が2課題抽出された。

1. 不自由な避難生活の改善

町の取り組み	部会の意見	評価点	順位
①個別訪問等による見守り	個別訪問はじっくりと	4	4
	県外に避難している人の心のケア	0	
②サポートセンターでの健康支援	交流の場に出てこない人たち	1	
③包括支援センターによる介護予防	包括支援センターによる介護予防	0	
④心のケア支援プログラム	心のケアをする場所がない	5	1
⑤緊急通報システム	(特になし)	0	
⑥保健師等の人材確保	保健師等の人材確保	0	

2. 町民の生活再建の実現(高齢者福祉等)

町の取り組み	部会の意見	評価点	順位
①長期的な健康管理	長期的な健康管理	0	
②定期的な健康診断	(特になし)	0	
③避難先自治体と連携した保健・医療・福祉サービス	デイサービスは双葉町民と利用したい	5	1
	借上住宅に住む人への医療情報やサービスが不十分	0	
	避難先の医療機関が不十分	5	1
	受入先の移動が難しい	0	
	福祉施設にいつまでいられるのか不安である	0	
④医療・介護施設の充実	介護施設の心配ごと	0	

3. 町外拠点における保健・医療・福祉体制の確保

町の取り組み	部会の意見	評価点	順位
①双葉町外拠点における保健・医療・福祉体制の確保	双葉町外拠点	0	

4. その他（医療・介護が必要な状況にしないための視点）

町の取り組み	部会の意見	評価点	順位
①町民の交流機会の確保	コミュニティがなくなった	3	
	生きがいが見いだせない	4	4
	一人ひとりに対応したサービス	0	
②新たな視点	避難先地域との軋轢	0	

* 部会の意見は、論点整理の見出しを記載しています。

■議論に参加するテーマの選択

上記の課題の絞り込みで第1位3つと第4位2つを選択し、うち第4位の「個別訪問はじっくりと」については対応策が明確であることから除外した。合計4つのテーマに絞り込み、部会員の討議参加希望を自己申告してもらった。その結果、下記の2テーマに絞り込んだ。

町の取り組み	検討課題	参加者
2-③	デイサービスは双葉町民と利用したい	なし
2-③	避難先の医療機関が不十分	なし
4-①	生きがいが見いだせない	グループA 高野、玉野、羽根田、福岡
1-④	心のケアをする場所がない	グループB 田中(勝)、田中(順)、永井、羽山、細澤

■ワークショップ成果の発表

◇グループA

部会員：羽根田、福岡、玉野、高野

発表の要点：生きがいが見いだせない

- 一人ひとりが意識改革をして、新しい地域へとけこんでいく。
- 各自の特技を生かして、地域に貢献しながら交流を図る。
- 一泊の町民スポーツ大会のためには、宿泊施設と移動手段が必要だ。
- 交流の情報発信は開催結果だけでなく、開催予定を発信すること。
- 町民の集まる場所が必要であるが、整備と運営に工夫が必要だ。
- 交流拠点は、近隣型、市内型、広域型と分けて検討する。
- 引きこもりの人には、強制的に参加してもらうような仕掛けも必要だ。

【カードに書かれた意見】

《地域へのとけこみ方》

- 意識改革をして新しい土地に積極的に関わる。
- 最終的な棲家が決まった人は意識改革できる。
- 地域にとけこむことは、個人の意識の改革が必要だ。
- 壁を取り払うことが重要だ。避難者であることをオープンにしよう。
- 住民一人ひとりが、避難先地区の各団体へ積極的に参加することから始めよう。農産物や食の交流から始める。
- 地元（避難先）で畑を借りて家庭菜園をしている。採れた野菜を近所へ配って喜ばれ、友人の輪が広がった。
- 妻がスイミングスクールで友人を作った。
- 地域へのとけこみ方として、以下の4段階が考えられる。
 - ①自分の地域（避難先）の自治会にまず入る。地域へのとけこみへつながる。
 - ②一つの団体に入ると芽づる式にコミュニティが広がる。
 - ③趣味がきっかけとなって交流が広がる。
 - ④個人の得意技を情報として調べて、地域の活動とマッチングさせることで交流のきっかけが広がる。

《交通見守り活動で地域貢献》

- 震災前から双葉町の小学校の交通安全指導を行っていた。
- 現在は郡山市で孫の通う小学校の見守り隊に入って、交通安全指導を実施している。
- 郡山の交通安全協会に誘われて、地元と交流活動が広がっている。

《地域にとけこめない人》

- 田舎の方で家を建てたが、地域にとけこもうと思っても、戸を開けてくれない。
- 地域（避難先）の自治会は問題ないが、隣近所のつきあい方が難しい。

《広域交流イベント》

- 町民交流やスポーツ大会は一泊で開きたい。（老人会では開催している）
- いわき周辺は宿泊先の確保が難しいので、宿泊場所がほしい。
- 遠隔地から集まるため、交通手段の確保が重要である。

《情報発信は結果よりも予告》

- タブレットはイベントの開催報告しか出てこない。今後の予定を知りたい。
- 釣りなどの趣味サークルの情報は仲間同士だけでやりとりしている。
- 趣味の情報を集約した場所やサイトが必要だ。

《集まる場所》

- 情報がいつでもとれて、離れていても来ることのできる、集える場所をつくる。

《運営の主体や資金》

- 運営は町民のNPOがやり、専門的なノウハウについて外部の指導をお願いする。
- 浪江、富岡には集まる拠点があるが、運営は資金面で大変だそう。

《他のよい事例》

- 浪江では、白河市の緑川産業（家具屋）の店舗の一角に、趣味で集まる場所を借りて、町が運営している。琴・踊り・写メとか企画をして、皆に来てもらっている。お互いプラスになっている。
- 郡山のサロンせんだんには必ず寄る。しかし、まだ狭いと思う。

《交流拠点の機能》

- 広いスペースで、手芸ができて、話すこともできるような場所が欲しい。
- 看護師が常駐して、血圧測定など健康相談できるとよい。
- 看護師のOBを有効活用する。
- 公民館を利用しているが、会場が毎回変わるので、固定の場所があるとよい。

- 拠点と周辺の住民を結ぶバスの運行を拡大する。

《いわき市内の拠点》

- いわき市内は面積が広いことから、北部、中部、南部に拠点が3か所ほしい。
- 仮設や借上げを区別せず、参加できる拠点がほしい。
- 双葉の人だけでなく、他の人も利用できるようにして交流したい。
- 町が湯本の温泉旅館を買い取って、全国の双葉町民の集まる広域交流拠点にしてはどうか。

《ひきこもりの人》

- 好きなものがない。友達がいらない。動かない人がいる。
- 仕事を引退して趣味がない人は、これから何をしたらよいかわからない。
- 64・5歳の方が家に引きこもっている。強制的に出てくるプログラムが必要。
- 65歳以上の人の予防介護が必要なので積極的に取り組む。健康づくりのプログラム。
- 訪問する人も目的が難しくなっている。(訪問が) 必要なところが分からない。
- 電話だけでもよいので、つながっている気持ちにさせる。
- 訪問しつつ、家でできるリハビリ体操を案内する。
- 逆療法として、問題になっている方々に、町の委員になってもらってはどうか。引きこもりの解消になる。

《カード記載以外の補足説明・感想等》

- 残された人生、生きがいを見つけることが大事。
- 拠点がなければ始まらない。切なる望み。
- 今あるものを使って拠点にする。

■グループAのまとめ（金子氏）

- 部会から具体的な事業のアイデアを創造して、実現することが大事だ。
- 地域に溶け込む双葉プロジェクト、家庭菜園でおすそ分け運動などに取り組んで関係をよくしていく。
- 双葉町民一芸プロジェクトなど、町民の得意技をリストアップして避難先の地域につないで、交流の輪を広げる。
- 交流という概念が、避難開始時点と今とで異なってきている。交流拠点とはなんなのかをもう一度整理する必要がある。
- 全国交流型拠点・県内交流型拠点・市内交流型拠点で、それぞれ役割を変えるなど、大胆に考える必要がある。
- 既にある公共や民間の遊休資産の活用が一つヒントになると思う。

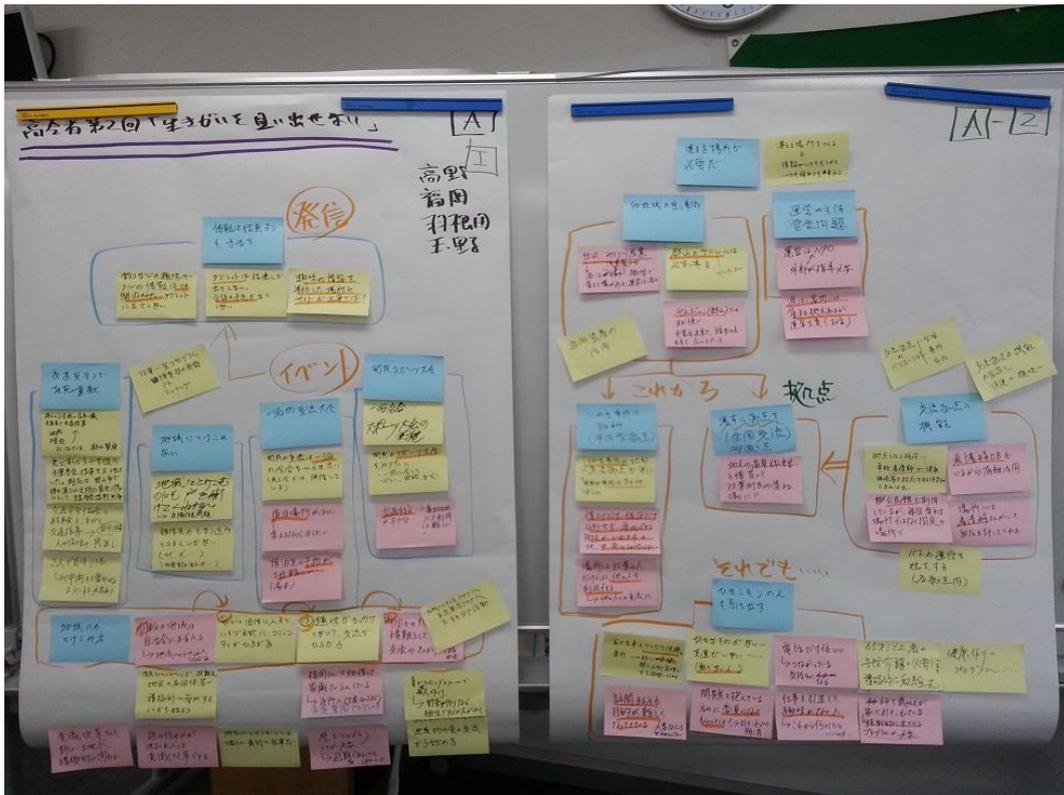
グループワークの様子



発表の様子



ワークショップの成果



◇グループB

部会員：田中（勝）、田中（順）、永井、羽山、細澤

発表の要点：心のケアをする場所がない

- 交友関係情報ネットワークを築いて、対象者を洗い出す。
- 相談窓口には専門の相談員が必要だ。
- 交流施設に気軽におしゃべりできるカフェをつくる。
- 町と町民が協力して、交流施設への相乗り送迎サービスをつくる。
- これからの事業は行政任せではなく、町民が運営の主体となる。
- これらの事業には町民のリーダーが必要となる。

【カードに書かれた意見】

《対象者の発掘》

- 心のケアが必要な方の洗い出しが必要（気づく）。
- 復興公営住宅に入る人は把握しておく（社協、民生）。
- 場所があっても出られない方もいる。
- どのようなケアが必要か。
- 交友関係ネットワークを築いておく。

《相談窓口》

- 誰に相談するのが良いのか。相談窓口の有効活用。
- 気軽に相談できる窓口を設置。
- 心の相談の窓口を利用するのがいいか。
- 窓口機関ホームページに専門員のプロフィールを掲載し、連絡しやすくする。

《専門職人材の育成》

- 専門職の育成又は採用。
- 知らない人が行ってもダメ。

《マッチング》

- 訪問していただいても掘り下げることができずに終わってしまう。
- 身内以外に相談者をつくる。
- 地域支援員から心のケアが必要な方の友達（心を開ける人）を（心のケアが必要な方へ）訪問できるようにする。
- 信頼できる人にまず相談してみる（じっくり話ができる人）。

《場所》

- 避難者としての受け止め方が強く、気軽に会話やおしゃべりができない。
- 双葉町だけの交流施設があれば（送迎が決めて）。
- 地域密着型の交流スペースが必要だ。
- 広域から集まれる拠点交流場所があるといい。
- ケアを必要とする人と、その友達が交流できるカフェスペースをつくる。

《ふたばーく》

- ふたばーくはPR不足で知られていないのでは。
- ふたばーくに畳の部屋を作るとよいのでは。
- ふたばーくのような施設を別の地区にも作ってほしい。
- ふたばーく内にカフェコーナーを作ってほしい。

《機会創出・送迎の仕組み》

- 結論としては、「町民主体」だと思う。
- 高齢者は運転できないので、送迎の仕組みを作る必要あり（町の予算で）。
- 相乗りなど、きちんとした送迎の仕組みが必要だ。
- 交流の場所へ相乗りで送迎しては。
- 車両は町で用意し、保険は町もちで、ドライバーは町民から募り、ローテーションで送迎する。

《町民主体》

- 行政任せではなく、町に予算だけを出してもらい、町民が主体的に運営する。

《リーダー育成》

- 交流スペースや送迎ローテーションを主導するリーダーが必要である。

《活動方針》

- 訪問活動の充実。
- 知り得た方々に声かけし、交流会に行きましょと誘いあう。
- 自分から双葉町のイベントなどに参加する。
- 個別訪問の時にそれぞれの交友関係を把握しておく。
- 買い物などで偶然に町民に出会ったとき、お茶飲みませんかと、素直に声掛けして、親しくなる。
- 個別で訪ねてもらえた方が安心する人もいる。
- 全体リーダーのもとに地域支援員を置く。

《カード記載以外の補足説明・感想等》

- 町が何もしてくれない、と行政任せではなく、行政には予算だけつけていただいて、町民主導でやるべきではないか。ただし、これらをマネジメントするリーダーの育成が必要だ。
- 個々のケア＝ソフト面の充実。
- みんなが元気になりたいと思っているので、よい施設を作ってほしい。
- 心のケアは一人ひとり違うので、交友関係などのネットワークを築いておくと、より一人ひとりの心のケアが必要な方の見落としがなくなると思う。

■グループBのまとめ（金子氏）

- 復興産業部会では、すべて失い、落ち込んだところから立ち上がるには働くことから始め、もう一度、生きがい・働きがいを感じたいという話があった。
- 高齢者でも働くことで元気を取り戻すということもある。
- 手作りで何かを作りリハビリにつとめるという例もある。
- 家に引きこもっている状態から、どこかに集まって手仕事からはじめて、仲間とわいわいしゃべりながら、楽しい時間を過ごす、そんなリハビリがあってもよい。
- コミュニティビジネス、ソーシャルビジネスといった、小さなビジネスから始めて、心が復興するということもある。
- 趣味などの身の回りのテーマをもとにコミュニティビジネスに取り組んでみるのもよい。
- コミュニティビジネスの成果物を、双葉町の特産品として、PRしつつ販売することも考えられる。
- 気仙沼ニット、愛知県足助町のZ I Z I 工房、バーバラハウスが参考になる。

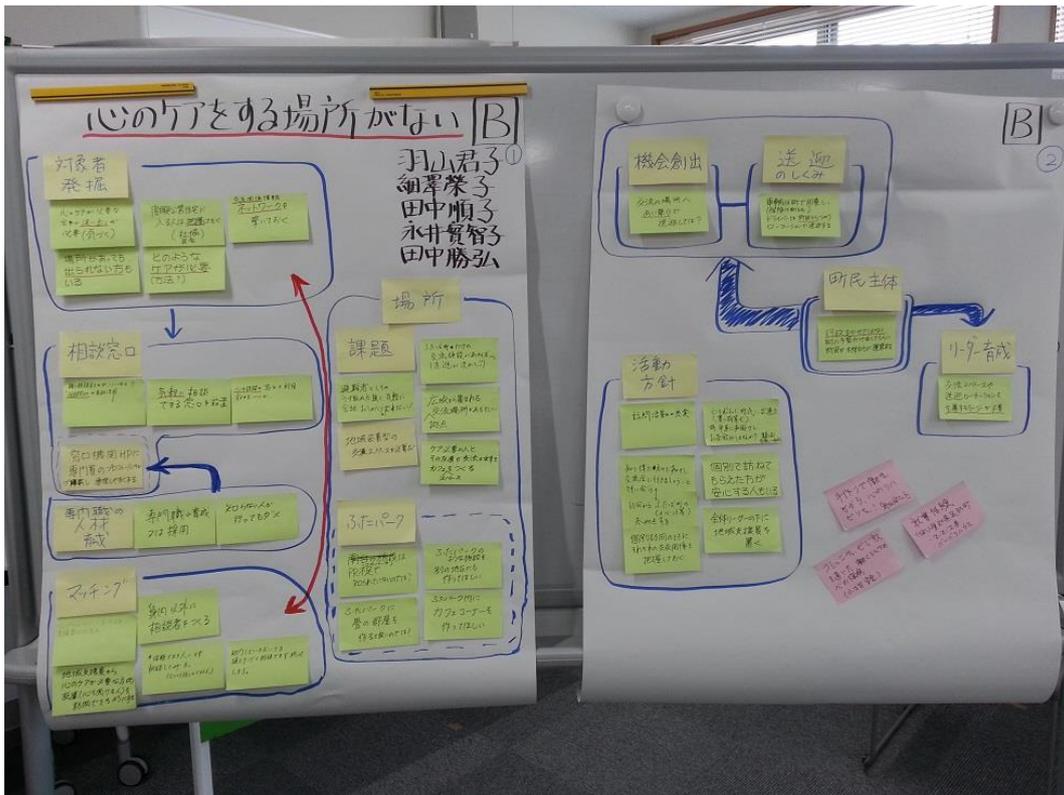
グループワークの様子



発表の様子



ワークショップの成果



第2回双葉町復興町民委員会 高齢者等福祉部会座席表 (敬称略)

資料2

- 1 日時 平成27年9月3日(木)13:00~16:00
- 2 場所 双葉町役場いわき事務所 2階大会議室

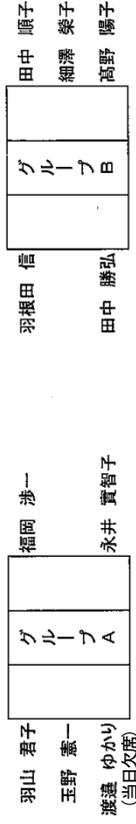
荷物置き場

オブザーバー
福島県相双保健福祉事務所
高齢者支援チーム
専門社会福祉士
高橋 秀雄

パネル

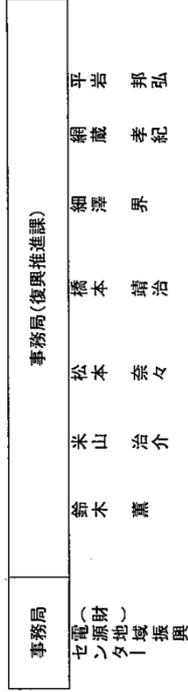
ワークショップリーダー

オブザーバー
総務課総括参事
武内 裕美
健康福祉課長
橋本 仁



飲み物コーナー

グループワーク時のグループ
グループA:
羽根田、福岡、玉野、高野
グループB:
田中(順)、田中(順)、永井羽山、細澤



受付

報道関係者 傍聴席